志賀の山越

――『大和物語』一三七段歌との関わりから――

一文字　昭子

「志賀の山越」は京都白川の地から崇福寺へ参詣する道として知られている。『大和物語』一三七段には、故兵部卿宮がこの道筋に家をつくり、参詣に行く女性を「見たまふ」話が書かれている。短い話なので全文をあげておく。(1)

志賀の山越の道に、いはえといふ所に、故兵部卿の宮、家をいとをかしうつくりたまうて、ときどきおはしましけり。いとしのびておはしまして、志賀にまうづる女どもを見たまふ時もありけり。おほかたもいとおもしろう、家もいとをかしうなむありける。としこ、志賀にまうでけるついでに、この家に来て、めぐりつつ見て、あはれがりめでなどして、書きつけたりける。

かりにのみ来る君待つとふりいでつつ鳴くしが山は秋ぞ悲しき

となむ書きつけていにける。

故兵部卿宮は、陽成院第一親王である元良親王（八九〇～九四三）、としこは藤原千兼の妻で、元良親王や親王の異母兄源清蔭と親しく交流があった。(2) ここでとしこが書き付けた和歌は表面上の解釈と喩えの関係が今一つわかりにくい。今井源衛氏は「狩りにばかり来られる宮さまをお待ちして鳴き叫んでいる鹿は―いつも浮気心でこちらにいらっしゃるあなたをお待ちして、秋の志賀山で声を挙げて泣いているのは悲しいことです」と通釈されつつ、この和歌に「君待つと」とあるのが解しにくいとされる。(3) そのことを「表面的には「待つ」の主語は鹿と解し得るが、その裏に詠み手である「としこ」が主語とも受け取れる。しかし、たまたま立ち寄っただけなのならば、京から親王が来るのを「待つ」のは変である」と説明される。「鹿」が表面上の主語と考えると、「狩り」にくる君を待つのもよくわからない。その違和感は「ふりいづ」という語と合わさることで一層強くなる。

ほとんどの注釈書(4)が、掛詞として「かり（仮・狩）」を挙げている中で、疑問を呈しているのは、柿本奨氏のみである。また「ふりいづ」については、『大和物語虚静抄』、高橋正治氏、今井源衛氏が「声を高くあげて鳴く」という意の外に、「紅を水にふりだして染める」と指摘するが、他は特に染色の意については触れない。「かり」に「狩」という意を想定するかについて、柿本氏は「掛詞なら「響かす」掛詞であろうが、狩場であったのかどうか」と書かれている。

狩場であったことについては次の二点からいえるかと思う。一つは「志賀の山越」歌の嚆矢とされる『古今和歌集』巻第二・春歌下、一一五番歌、紀貫之の歌である。

志賀の山越に女のおほくあへりけるによみてつかはしける
梓弓春の山辺をこえくれば道もさりあへず花ぞちりける

この歌は「春（張る）」を導き出す弓から「狩り」が連想される。上條彰二氏が指摘されるように屏風歌として詠まれた可能性を考慮に入れても、歌を鑑賞する側に弓、志賀山、狩という連想は働くであろう。[5] 二つ目は『元良親王集』九五番歌に「志賀に狩りし給ふとき」という詞書があることである。[6] 元良親王は『大和物語』一四〇段にも「宇治へ狩しになむいく」とのたまひける御返しに、み狩する栗駒山の鹿よりもひとり寝る身ぞわびしかりける」とあり、狩を好んでいたようである。親王の父である陽成院にも狩の記事が『扶桑略記』にあり、父子の共通した嗜好であった推定される。[7] 多くの寺が点在する山であるが、寺社の影響力が全山に及んでいたわけではないようである。

ただ志賀の山が狩場であったとしても、ここで掛詞として「狩」を認めると、「ふりいづ」という詞と共に使われると、問題が生じる。「ふりいづ」には辞書的に「（鳥や虫などが）声高く鳴き出す」という意と「紅を水にふり出して染める」という意がある。『大和物語』三段で、としこは染色を得意とする女性として登場するので、としこの歌に「ふりいでて」と詠まれれば当然、染色が想定されることになる。『大和物語虚静抄』では一二七段の「鹿の音はいくらばかりのくれなゐぞふりいづるからに山のそむらむ」という歌と同じ心であるとし、高橋正治氏は一二七段歌を「鹿の鳴き声と、紅葉との間に因果関係がないが、掛詞を媒介として因果関係をつけた、機知による歌」と解説する。[8] 「狩」という前提がなければ一三七段のとしこの歌に「ふりいづ」の二つの意味を重ねても何ら問題はないが、「狩」が入ると、「紅を水にふり出して染める」という意味は、和歌としては、はなはだ不穏当な方向へ想像を導いていきかねない。それを和歌の伝統からはずれた恣意的な解釈といわれればそれまでであるが、柿本氏が指摘されるように『大和物語拾穂抄』が「狩」を掛詞として指摘しないのは、あえて「響かす」ことをしないためとも考えられる。あるいは今井氏のように「待つ」の主語を「鹿」と捉えずに、「かりそめにいらっしゃるだけの貴方を待つ私」と「異性を求めて鳴く鹿」という両者が同じ場所にいる、この「秋の志賀山は哀しい所です」と分けて解釈するしかないのであろうか。

この一三七段歌は、『新勅撰和歌集』と『元良親王集』にも収められている。『新勅撰和歌集』では三〇〇番歌から三一〇番歌まで「鹿」を扱った歌を配置している。当該歌は三〇一番、詞書は物語とは異なり、「時々かよひすみ侍りける」となっている。そのため「狩」を掛ける必然性は低い。

『新勅撰和歌集』秋歌下[9]

三〇〇　あきふかきもみぢのいろのくれなゐにふりいでつつなくしかのこゑかな　躬恒

兵部卿もとよしのみこ、しがの山ごえの方に時時かよひすみ侍りける家を見にまかりて、かきつけ侍りける　　とし子

三〇一　かりにのみくるきみまつとふりいでつつなくしか山は秋ぞかなしき

題しらず　　中納言家持

三〇二　秋はぎのうつろふをしとなくしかのこゑきく山はもみぢしにけり

「狩」がなければ、この三首は、鹿の鳴声によって、紅に染まるように山が紅葉することを詠んだだけで、なんら問題は生じない。『元良親王集』では後ろに続くの歌と密接に繋がっており、直後の歌とは「隠る」という語で繋がり、そこから「仮に」と「雁に」と続いていく構成がみて取れる。

『元良親王集』[10]

しかの山こえのみちに、いもはらといふ所もたまへりけり、そこにこかくれつゝ人みたまけ(ママ)るをしりて、としこかかいつけゝる

一三七　かりにのみくるきみまつとふりいてつゝなくしか山はあきそかなしき

ある女、御ふみつかはすに、かくれて侍らすといはすれは、宮

一三八　かくれつゝきくからにこそふかせりのおふるそこそと思やらるれ

又、つかはす

一三九　なきかへるかりにもあらぬたまつさをくもゐにのみそまちわたりける

相手と逢えないことを詠んだこの三首に、前出の九五番、志賀山の狩の歌の影響が及ぶかは難しいところであるが、「かり」の掛詞は一三九番歌を詠めば、「仮」「雁」を示しており、『大和物語』一三七段とは異なる。

ところで上條彰二氏は「志賀の山越」について「この詞は、古今集以後もしばらくの間、和歌の詞書中にのみ現れている」と指摘され、また「志賀の山越」が歌詞(うたことば)的用法に変化しはじめるのは後拾遺集前後からで、その要因は志賀寺（崇福寺）の衰退にあるとされた。また歌詞(うたことば)として「志賀の山越」が「流行風靡」となったのは『六百番歌合』以後と指摘されている。[11]たしかに『大和物語』も『古今和歌集』も、和歌の中に「志賀の山越」を使っているわけではなく、詞書に提示しているだけである。『大和物語』では「志賀にまうづる女ども」「としこ、志賀にまうでける」とあるので、崇福寺参詣の道を指していることは間違いない。崇福寺は天智天皇の発願により七世紀後半に創建され、平安貴族の尊崇をうけ隆盛したが、寛元年（一一六三）の延暦寺衆徒による園城寺焼き討ちの際に焼亡したと推定されている。平安末期以降、記録がなく廃寺となった経過はわからない。昭和三年（一九二八）からの考古学的調査により、寺院跡が確定され、国指定史跡となった。[12]

『古今和歌集』も山の中で「女のおほくあへりける」のは参詣路

であったからとしか考えられない。紀貫之は四〇四番歌（巻第八・離別歌）でも「志賀の山越にて」という詞書きをもつ歌を詠み、「あか（閼伽・飽）を掛けることから参詣路であることがわかる。

志賀の山ごえにて、石井のもとにて物いひける人の別れけるをりによめる

むすぶ手のしづくににごる山の井のあかでも人に別れぬるかな

この和歌は藤原俊成によって高く評価をされた。[13]「石井」「山の井」は山中町樹下（じげ）神社入口にある井戸が比定されている。現在は井戸に蓋がされて直接みることができないのが残念である。

一般的に「志賀の山越」と言えばその名称からいって、京都北白川から近江の志賀の里[14]に至る間の山を越えていく道の総称で一筋ではない。主要な経路は如意ヶ岳を越えていく道（①如意越）、現在の山中町を通過していく道（②山中越・今道（路）越）、一本杉を通過する道（③白鳥越・青山越）の三つで、これらの道が分岐や結合、あるいは経路の変遷等によって網目のように山中を通っている。この山道についてはすでに森本茂氏が詳細に検討されているので、その成果に多少の補足を交えて概要を示しておく[15]（後掲地図参照）。

①の如意越は、京都北白川から白川沿いに入るが、途中で支流の新田川に沿って如意ヶ岳に登り、そこから園城寺へ至る道である。如意ヶ岳から大文字山を通って鹿ヶ谷に出る経路もある。[16]「如意ヶ岳」を通るためにこの異称があり、顕昭が『袖中抄』巻十七で注記している「志賀の山越」は「如意のみねごえに」とあるので、この道のことを指していると考えられる。如意ヶ岳は標高四七二メートル、山頂には園城寺の別院があった。京から園城寺へ行く場合、出発地にも寄るが、通常は粟田口から逢坂・小関越を通る。逢坂越は種々の文献から牛車で通ることもできたと判断される。[17]

②の山中越は、北白川から白川沿いに登っていき、分水嶺の手前の山中町を通って志賀の里へ至る道である。[18]山中町を通るためこの異称を持つ。ここを通り崇福寺へいく道が、いわゆる和歌で詠まれる「志賀の山越」とされる。山中町からはこのほか延暦寺方面の一本杉へ行く道や、また田ノ谷峠へと向かって降りていく道などに分岐する。森本氏によれば、『太平記』に一本杉へ向かう道が「今道越」として登場する。[19]田ノ谷峠方面へ向かう道もあり、現在の下鴨大津線（京都府道・滋賀県道三十号）がこれにあたる。この道も今道越と称される。「今」は新しく開かれた道で、如意越に対して新しく開かれたという意味であるようである。[20]分岐点山中町については、和歌を除けば史料に残る記録は室町時代までしか遡れない。内蔵（くら）寮の卒分関や延暦寺管轄の関、二条家の領地があったことが確認されている。[21]戦国時代にこのあたりを掌握していたのは礒谷（いそがい）氏でその菩提寺極楽寺が現存する。

③の白鳥越は、京都の北白川、あるいは北の一乗寺から一本杉へ至り、そこから近江側の穴太、もしくは崇福寺へ出る経路で、古路（ふるみち）越、青山越という別ルートもある。[22]こちらも「志賀の山越」と呼ぶ場合があったようである。[23]

そもそも「シガ」という名称は吉田茂樹氏によれば、「しか（石処）」の意で、石の多い土地をいうとのことである。[24]『和名抄』ではシカ、シガ共にスカ、スガの転で、「州処」つまり「砂州のあるところ」の意とする。[25]志賀の山越の道が通るこの一帯の山は、もろい

地質で、下は白川が形成した洲による石の多い、崩れやすい地である。京都側の登山口である白川は、源流部・上流部の山地が、著しく風化の進んだ花崗岩地帯であるため、河床も中・下流域も、花崗岩砂、すなわち石英を主とする白砂からなり、川名もそれに起因する。[26] 上流に位置する山中町には、近いところでは昭和十年（一九三五）六月に起きた山津波の記憶を留める石碑もある。[27] 同様の現象は長い歴史の中で繰り返されたことと推測される。

『大和物語』一三七段では元良親王が「志賀の山越の道に、いはえといふ場所に」山荘を建て、参詣する女性たちを「みたまふ」たわけであるが、現在「いはえ」という地名は残っていない。森本氏は、「いはえ」という語が諸本により「いは江」（為衆本・宮内庁書陵部本）、「いはみ」（為氏本）、「いもはら」（勝命本・御巫本・鈴鹿本）、「いはす」（寛喜本）などの異文が見られることから、語頭に「いは」がつく地であり、かつ山荘を建てられる環境の場所と考えて、京都北白川琵琶町の西にある、丸山周辺とされた。[28] 北白川琵琶町は白川に沿うように広がる町である。森本氏が推定された山荘比定地は、元良親王の祖父清和天皇終焉の地であった円覚寺推定地と近い場所にある。[29] 円覚寺はもともと陽成院の外戚、藤原基経の粟田山庄があった場所で、元良親王の父陽成院も冷然院で崩御したのち円覚寺に安置された。陽成院の御陵は吉田山南にある。

「いはえ」は白川が形成した三角洲であり、異文「いはす」や「いもはら」は単なる誤写や手書きによる変化による可能性だけでなく、あるいは時代によってこの場所の地形を反映した名称とも考えられる。笹川尚紀氏は『後光明照院関白日記』正中二年（一三二五）九月一九日条の興味深い記事をあげている。[30] 六月に京都で激しい雷雨があり、大洪水となった。白川も氾濫し、辺りの白砂が数十町に広がり、その様子がまるで紀伊の吹上浜のようになったという。「いはす」「いもはら」は、そうした時期の呼称とも考えられる。

陽成系皇族と「志賀の山越」との関わりは、『蜻蛉日記』からも読み取れる。道綱母は晩年、夫兼家が源兼忠女に産ませた女児を養女として迎えるが、そのとき交渉にあたった僧が「山越」、つまり志賀の山越をして、兼忠女のところへ赴いている。兼忠は陽成院の孫にあたる。[31] 天禄三年（九七二）のことであった。興味深いことに歌人として名高い道綱母は、この道を「志賀の山越」つまり歌に関わる道としては記述していない。むしろ、養女候補が陽成院という高貴な血筋であることの意識の方が印象的である。道綱母からは陽成院に対する負のイメージ―十七歳で退位する要因である乳母子の源益格殺事件や、退位後の粗暴な振る舞いによって「悪主」と評されたこと[32]―は全く感じられない。陽成院の崩御は天暦三年（九四九）で、『蜻蛉日記』の記事はそれから二十年ほどたっていることになる。

陽成院の息子である元良親王が、そもそも「志賀の山越」の道に別邸を造ったのは、そこがゆかりの地であり、狩りができ、女性が行き交う所であったからであろう。『大和物語』一三七段では親王が「女どもを見たまふ時もありけり」とあり、この「も」という文字の効果を考えると、今井氏が指摘するように元良親王は鹿狩にかこつけて「女狩」「も」していたという話である。しかも一人二人の話ではない。そのこと考えれば、「かり（仮・狩）」はたしかに響いている。そこに「ふりいづ」という語をあえて使っていることから考えると、としこの歌には綺麗事ではすまされない「狩られる」

側の思いも籠められているように思えてならない。後の歌集で、「狩」との結びつきを意図的に回避しているすれば、それは翻って物語の歌が、いわゆる和歌の規範からは自由であり得たということになる。

陽成院が崩御したのは、天暦三年（九四九）、元良親王は父院に先立つ天慶六年（九四三）に亡くなった。わずか十七歳で退位した陽成院は、実に光孝、宇多、醍醐、朱雀、村上と五代を院として過ごした。陽成院の第一親王であった元良親王は代を重ねるごとに皇統から遠のいていく。『大和物語』の成立は、天暦五年（九五一）頃を上限とし、円融朝（在位九六九年～八四年）あたりを下限とすると言われている[33]。崇福寺はまだ健在で、「志賀の山越」の道は多くの女性が参詣に通っていた。無数にある山越の道の中で、平安貴族にとって、その入口に皇族ゆかりの地を持ち、険しい登り道に映る紅葉の美しさ、仏のおはす崇福寺が目的地である「志賀の山越」は、特別な一筋であったことは想像に難くない。

注

(1) 高橋正治他校注『竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』（新編日本古典文学全集一二、小学館、二〇一四年七刷（一九九四年初））三五四ページ

(2) 阿部俊子『校本大和物語とその研究』（三省堂、一九五四年）、角田文衛「とし子」（『王朝の映像』東京堂出版、一九七〇年）、森本茂「大和物語の「としこ」考」（『平安文学研究』第七九・八〇輯、昭和六三年（一九八八年））

(3) 今井源衛『大和物語評釈』下巻、笠間書院、平成一二年（二〇〇〇）、一三二ページ

(4) 北村季吟『大和物語拾穂抄』（本多伊平『大和物語抄』和泉書院、昭和五八年）、木崎雅興『大和物語虚静抄』（国文学研究資料館・新日本古典籍総合データベース 100000512・筑波大学附属図書館マイクロ収集 120-35、第二一八コマ、参照 2020-8-17）、浅井岑治『大和物語新釋』（大同館書店、昭和六年）、阪倉篤義・大津有一・築島裕・阿部俊子・今井源衛校注『竹取物語・伊勢物語・大和物語』（日本古典文学大系九、岩波書店、昭和三二年（一九五七））、武田祐吉・水野駒雄『大和物語詳解』（湯川弘文社、昭和三九年（一九六四））、高橋正治『大和物語』（日本古典文学全集八、小学館、昭和四七年（一九七二））、柿本奨『大和物語注釈と研究』（武蔵野書院、昭和五六年（一九八一））、森本茂『大和物語全釈』（大学堂書店、平成五年（一九九三））、高橋正治『大和物語』（新編日本古典文学全集一二、小学館、一九九四年）、今井源衛『大和物語評釈』下巻（笠間書院、二〇〇〇年）、雨海博洋・岡山美樹全訳注『大和物語』下（講談社、二〇〇六年）

(5) 上條彰二「「志賀の山越え」考―俊成歌観への一つのアプローチ―」（京都大學國文学會編『国語国文』第三七巻第十号（四一〇號）、昭和四十三年十月）

(6) 『元良親王集』九五番歌（『私家集大成』巻一・五六、日本文学 Web 図書館、参照 2020-8-17）・冷泉家時雨亭叢書第六十四巻『平安私家集十二』（朝日新聞社・二〇〇八年）

(7) 『扶桑略記』（『新訂増補国史大系』第一二、国史大系刊行会、一九三二年）寛平元年十二月二日条

(8) 注(1)の当該段頭注

(9) 『新勅撰和歌集』（『国歌大観』巻一・九（日本文学Ｗｅｂ図書館参照 2020-8-23））

(10) 『元良親王集』（『私家集大成』巻一・五六（日本文学Ｗｅｂ図書館・

参照 2020-8-17))

(11) 注(5)参照

(12) 『日本歴史地名大系』『国史大辞典』『日本国語大辞典』参照（Japan Knowledge 参照 2020-9-14）

(13) 有吉保校注・訳『古来風躰抄』（新編日本古典文学全集八七『歌論集』所収、小学館、二〇〇二年）「大かたすべて、詞、ことの続き、姿心、限りなく侍るなるべし。歌の本躰は、ただこの歌なるべし」とある。

(14) 森本茂「志賀の山越えの「いはえ」考」（『奈良大学紀要』第一七号、昭和六三年九月）志賀の里は森本氏によれば、現在の滋賀里から園城寺までの南北二、三キロの地域と考えられる。

(15) 注(14)参照。『日本歴史地名大系』第二十五巻「滋賀県の地名」（平凡社、一九九一年）、『角川日本地名大辞典』二五「滋賀県」（角川書店、昭和五四年（一九七九））

(16) 寒川辰清編輯『近江国輿地志略』巻之四「道路山城国路○如意越（『大日本地誌大系』第二二巻所収、雄山閣、昭和四年）

(17) 『平仲物語』二十五段、『蜻蛉日記』天禄元年の記事、菅原師長『関寺縁起』、『今昔物語集』十二本朝付仏法「関寺駈牛化迦葉仏語二十四」他。

(18) 注(16)参照、巻之十五「志賀郡第十〇山中越」

(19) 注(14)参照

(20) 注(18)参照

(21) 『日本歴史地名大系』第二五巻「滋賀県の地名」（平凡社、一九九一年）

(22) 注(18)参照、「志賀郡第十〇白鳥越」「穴太村より、山城の国修學寺村に至るの路なり、白鳥・青山、みな叡山のつゞきの山の名なり」と書かれる。

(23) 『角川日本地名大辞典』三五八ページ

(24) 吉田繁樹『日本地名大事典』上（二〇〇四年、新人物往来社）・『日本古代地名事典』（二〇〇一年、新人物往来社）

(25) 楠原祐介・桜井澄夫ほか編『古代地名語源辞典』（昭和五七年再版（昭和五六年初版）、東京堂出版）

(26) 『角川日本地名大辞典』二六「京都府」上（角川書店、一九八二年）七八八ページ

(27) 「大阪朝日新聞滋賀版」昭和十年七月二日の記事

(28) 注(14)参照

(29) 笹川尚紀「円覚寺・東名寺・東明寺にまつわる基礎的考察」（『京都大学構内遺跡調査研究年報二〇〇八』二〇一一年三月）

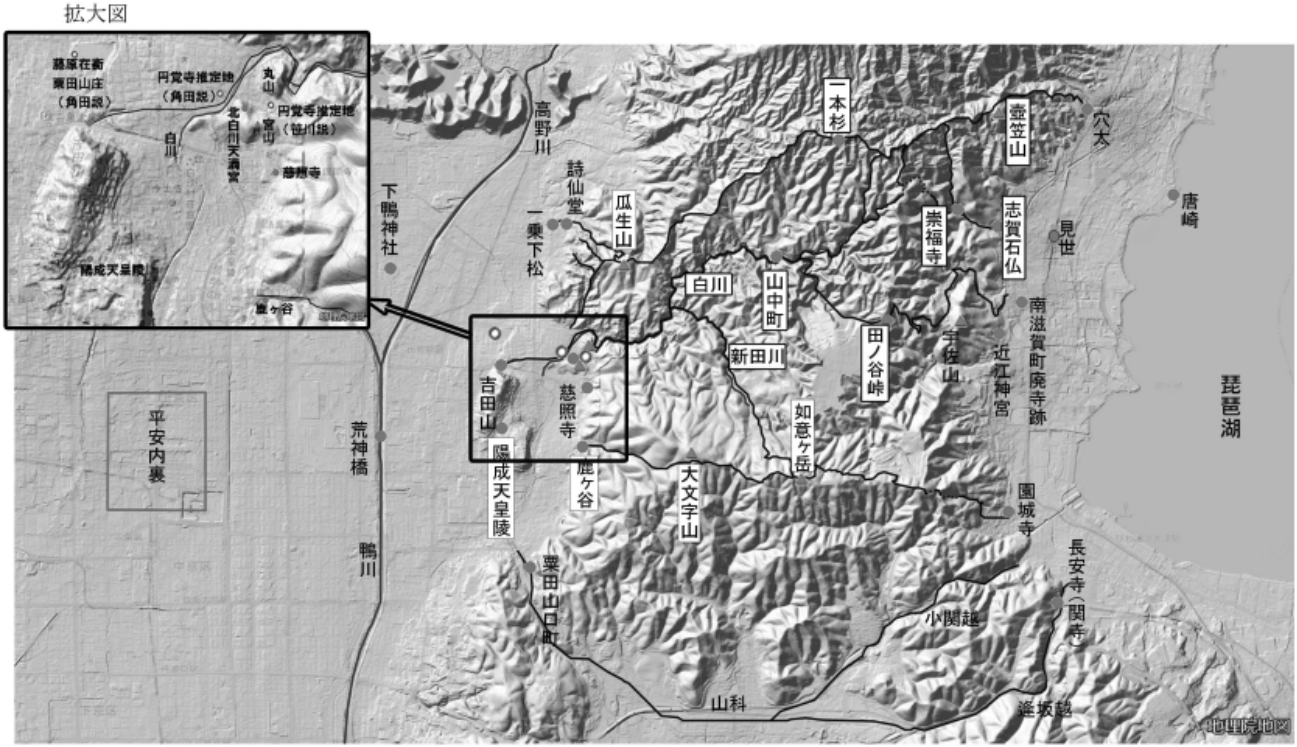
(30) 注(29)参照

(31) 『尊卑分脈』第三篇（『新訂増補国史大系』第六十巻上、吉川弘文館、一九六一年）陽成源氏の項。源清蔭（紀氏所生）男。なお、清和皇子貞元親王男とする史料もあるが、『蜻蛉日記』の記述からも、陽成源氏と考えられる。

(32) 『扶桑略記』仁和五年（八八九・四月二七日改元、寛平元）八月十日条・十五日条（『新訂増補国史大系』第十二巻、国史大系刊行会、一九三一年）

(33) 注(1)参照

「志賀の山越」参考図



国土地理院地図より作成

北白川琵琶町は、白川沿って山中町手前までの地域
北白川岩坂町は琵琶町の北側

子安観音から山中町まで、道（下鴨大津線）はほぼ白川に沿っている。山中町に入る箇所で、町内と通る道と迂回するバイパスに分岐、山中町東端で再び、下鴨大津線と合流する。如意ヶ岳へ向かう道も、白川の支流、新田川に沿って登る。

2020. 10. 31　一文字昭子作成